

骨髄採取後、左腸腰部位に血腫を認めた事例

2003年8月、非血縁骨髄ドナーからの骨髄採取後、左腸腰部位に血腫ができるという健康被害が発生しました。

【経過】

骨髄採取翌日、ドナーが左下腹の圧痛を訴えられ、CTスキャンなどの検査を実施したところ、左腸腰筋内に血腫およびガス像が確認されました。止血剤並びに抗生物質の投与が開始されました。ドナーのヘモグロビン値は、一時12.8g/dlまで低下(骨髄採取前のヘモグロビン値は、16.1g/dl)しました。左腹部の圧痛もありましたが、歩行は可能で、食欲などの全身状態は良好でした。その後、まもなく回復し社会復帰されました。

【対策】

当財団では、全国の採取施設に対し骨髄穿刺の部位と深さに十分注意するよう「緊急安全情報」を発出しました。また、原因究明と再発防止の観点から、調査しました。その結果、採取針の貫通が原因であると考えられたため、穿刺針の長さや腸骨の厚みを十分配慮して、穿刺の深さを調整するよう「安全情報」を発出しました。

[緊急安全情報 \(PDF\)](#)

[安全情報\(報告\) \(PDF\)](#)